



TITLE:

夏

AUTHOR(S):

星見小路

---

CITATION:

星見小路. 夏. 天界 1926, 6(66): 343-343

ISSUE DATE:

1926-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160558>

RIGHT:

るが、外合のときは一番遠くて天文單位の七割増し位の距離になるから前の場合に比べるゝ約七倍位の遠さになる譯である。それで全面輝いてゐる外合の場合には一番遠く、又折角近くても内合の場合には全面闇だといふ譯で最も光輝の大なる時は三日月形に輝いてゐる場合に相當するといふことは一寸驚かされるであらう。

## 夏

夏來れば、人は言ふ  
ゆるやかに波寄する畔  
南國の、棕櫚の葉蔭に  
涼さるむ。

あるは又、山莊の  
白樺の木立の奥に  
塵の世をしばし忘れて  
笛吹かむ。

さはあれど  
山莊と海邊の家は  
美しき憧れにこそあれ  
『額に汗せむ』われ等には  
はかなくも空しき願なり。

されど君  
徒らに、な悲しみそ  
炎陽と汗の晝去れば  
大ひなる星の家  
人の世を<sup>つつ</sup>抱擁むべければ。

されば君、かゝる時  
湯あみの後の衣も軽く  
仰げ。夏の夜の天空を。  
見よ。南天に銀河すぐ立ち  
『大火』は靈光の如く赤く  
『白鳥』舞ひて天頂に歌ふ。  
さてまた『織女』と『牽牛』は  
人の世の戀の守りさ  
麗しく向ひて立てり。

夏の夜の星は美し、山莊と  
海邊の家のなど要あらめやも。

(星見小路)